

# 市長年頭のごあいさつ

## 「心が通う便利で 豊かな田舎暮らし」がつくる 新たな都市のかたち



舞鶴市長  
多々見 良三

新年あけましておめでとうございます

昨年は、新型コロナウイルス感染症が世界中で猛威を振るい、日本国内においても、3月頃から急速に感染が拡大し、4月には緊急事態宣言が全国に発出されました。

本市も感染事例はありましたが、市民の皆様、市内各界の皆様のご協力により少人数にとどまっています。また、感染された方へのご配慮と「新たな生活様式」の徹底など冷静な行動へのご理解、ご協力いただきましたこと、改めて深く感謝申し上げます。

現在、国は、検査能力の向上、ワクチンの早期確保などをはじめ、感染症対策に全力を挙げていますが、世界中に蔓延する新型コロナウイルス感染症を完全に克服するまでには、まだ一定の期間が必要です。今後、当面の間は、感染拡大の防止と経済活動を両立しながらまちづくりに取り組んでいかなければなりません。

また、その先にある、感染症に打ち勝ち、乗り越える「ビヨンド・コロナ」の社会を築いていくためには、東京をはじめとする「3密」の状態でしか成り立たない都市を中心とする大都市集中型の社会から、重要な地方の拠点都市と大都市が連携し、共生、役割分担する地方分散型の社会を実現することが極めて重要となります。

そのような中、本市が推し進める、豊かな自然、連続と引き継がれてきた歴史・文化「お互いさま」の精神が根付いた地域コミュニティや「京阪神」や「中京圏」などの大都市と適切な距離を保ちながら、つながることができる高速交通ネットワーク、産官学金労言士をはじめ、教育機関や民間企業などの多様な連携を生かしたまちづくり「心が通う便利で豊かな田舎暮らし」の実現に向けた施策のさらなる推進が、まさに「ビヨンド・コロナ」社会において求められている地方分散型社会のモデルになる取り組みであると考えています。

昨年、日本交通(株)とオムロンソーシアルソリューションズ(株)(以下、OSS)と共に実施した、日本初となるバス、タクシー、住民同士の送迎を組み合わせた「共生型Maas」いわゆる「memo」の実証実験は、今後、現在の交通サービスの維持・確保が困難になることが予想される中、将来にわたって地域の移動手段を確保するた

めには「今何をすべきか」を考え、高野地区、加佐地域の皆様と共に、試行錯誤を繰り返しながら取り組んだものです。

また、KDDI(株)、舞鶴高専、OSSとの連携によって雨量と河川の水位情報から河川の氾濫や浸水予測などをする研究と、これらの情報を皆様も見ることができるモニタリングシステムの整備の取り組みなどが評価され、国の「戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)」の実証実験モデル自治体に、全国4自治体の一つとして選定されました。

地域の未来を担う子ども達に向けては、京都大学舞鶴水産実験所や日立造船(株)舞鶴工場などに協力いただき、海や魚などの自然科学について学ぶ教室や、実際に作っている工業製品などの制御盤の仕組みを使った電気工作体験、舞鶴高専出身者が起業したさくらインターネット(株)監修のプログラミング教室などを実施し、都会に出なくても次代の産業に触れ、学べ、仕事にできる環境づくりに取り組みました。

そのほかにも「ビジネス創出」「教育」など交流を起点とする地域活性の拠点として整備した「Coworkation Village MAIZURU」を活用した企業などとの多様な連携により課題解決に向けた持続可能な新しい地域成長モデルの構築を進めています。また、若手事業者が合同でこのまちに眠っている多くの魅力を発掘し、地域そして全国に発信するなど、まちづくりへの強い思いが大きく広がっています。

地域の皆様が、これからの考え、またその先の未来を見据え、次世代のために取り組むまちづくりが求められています。

市は、今後とも、多様な連携のもとに、先進技術を活用して、世代を超えた人と人とのつながりや助け合い、お互いを思いやる、すなわち「心が通う便利で豊かな田舎暮らし」を推し進めてまいりますので、本年も変わらぬお力添えを賜りますよう、よろしく申し上げます。

年頭にあたり、市民の皆様のご健勝とご多幸を心からお祈り申し上げまして、新年のご挨拶とさせていただきます。